

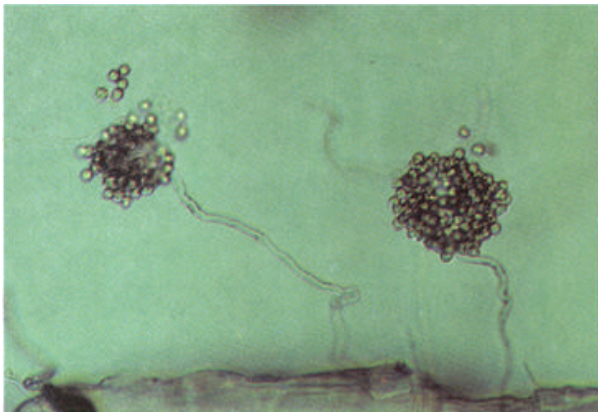
### <ケイトウ根腐病>



青枯れ状にしおれ、枯死する。



根はあめ色に腐敗する。



病原菌の被のう胞子塊。

### <ケイトウ根腐病>

病原菌：Aphanomyces cochlioides Drechsler

#### 1. 症 状

生育全期にわたり発生する。子苗では胚軸が水浸状に軟化し、次々に倒伏、枯死する。鉢上げ後あるいは定植後の株では、根があめ色に腐敗し、地際部の茎にも水浸状のち褐色の病斑が現われ、株全体が青枯れ状に萎れ、徐々に倒伏、枯死する。降雨が続くと下葉に水浸状のち褐色の不正斑を生じることもある。本病の正確な診断には発病株の腐敗根を低倍率の顕微鏡により観察し、卵胞子を確認する。また丁寧に水洗した根を蒸留水に12～24時間程度浸漬すると、糸状の遊走子のうと被のう胞子の集塊を認める。

#### 2. 生 態

排水不良の圃場に発生が多い。伝染源は罹病残渣中や土中に卵胞子・菌糸の形態で残存し、これらは湿潤状態で遊走子のうを形成して、遊走子により感染する。本病菌はハウレンソウ根腐病菌と同一であり、ケイトウのほかハウレンソウ、フダンソウに強い病原性を有す。品種間に感受性の差異が認められ、ゲラナ、ジェルボックス、ローズビューティーなどの品種は感受性が高く、オリエント2号、ローズグローなどの品種は比較的耐病性がある。

#### 3. 防 除

- 1) 無病苗を育成、定植する。
- 2) 雨水が停滞しないように排水を良好に保つ。
- 3) 連作を避ける。
- 4) ダコニール1000の土壤灌注は有効である。

#### 4. 記 事

本病は1988年（昭和63年）、立川市などで多発生した。